

Samuel Newlands, *Reconceiving Spinoza* (Oxford University Press, 2018, x+283p.)

林智行

はじめに

本書は、(1) (英語圏における) 現代スピノザ研究の一つの典型であると同時に、(2) スピノザ研究者以外に、現代形而上学に興味のある読者にも興味深いものである。

(1) まず本書のスピノザ研究としての性格は、綿密なテキスト解釈をもとにしつつも、哲学史の中にスピノザを位置づけることよりは、解釈上の一定の指導原理を立てて『エチカ』を中心としたスピノザの主張を内在的かつ整合的に解釈することに重点を置くタイプの研究である。

具体的には、形而上学的な「完全性」、つまり基礎的なレベルにおける儉約性（たとえば実体はただ一つのみ存在するという一元論）と、派生的なレベルでの充満性（その実体の無限に多くの属性や様態など）が整合的に両立している、というのが本書の立てる指導原理である。この点で本書は、たとえば PSR（充足理由律）を指導原理に据えた Della Rocca の *Spinoza* (2008) のような研究と比肩されうる。実際本書は同書の掲げる「説明的な合理主義」に共感を示しながらも、PSR が指導原理としては不適格であることについて一節を割いて批判して

いる（1章4節）。

(2) 一方、この完全性という指導原理は具体的には、一種の相対化戦略として実装される。つまり、本書の『エチカ』解釈によれば、同じ一つの事物が様々な、時に相反する性質を持つことは、その事物についての「考えられる仕方 (how it is conceived)」という概念的なあり方によって相対化されることで可能にされる。何らかのインデックスによって相対化することで哲学上の問題の解決に取り組むこと自体は、現代哲学ではおなじみの手法である（指示的不透明性におけるコンテキスト、様相論理における可能世界 etc.）。しかし本書は、スピノザにおいて、概念的なあり方によって相対化されるべきあらゆる形而上学的依存関係自体が、この概念的なあり方そのものであるとする点で、極端な相対化戦略に出ている。

しかしこの戦略には、大きく二つの問題があると本書は指摘している。第一に、「考えられる仕方」がもし、その名が示唆するように思惟属性の中でしか成立しないとすれば、あらゆる形而上学的依存関係が「考えられる仕方」であるとは言えない。この問題に対して本書は、概念的なあり方とは思惟属性に限定されない属性中立的なパターンであるという解釈を示す（9章）。この解釈は概念的なものを心的なものと同一視する Della Rocca（前掲）の観念論的解釈に対する応答という側面も有する。

第二の問題として、極端な相対化戦略の結果、相対化戦略が自壊するという問題が

指摘される。至る所に「考えられる仕方」という概念的なあり方のみが見いだされるため、相対化されるべきその同じ一つのそれ (it) の同一性までもが「考えられる仕方」によって変化しかねないというのである (本書 6-8 章)。この問題に対して本書が与える解決は、同一の物を違う仕方で「考え直す (reconceiving)」ことであり、それが書名の由来ともなっている。

第一の問題に本書が与えた解決の成否は、興味深くはある。しかしそれは主にスピノザ研究者の間での興味の範囲に閉じるだろう。本書評はむしろ、第二の問題に本書が与えた解決の成否に焦点を当てる。なぜなら、この第二の問題は、形而上学において相対化戦略を極限まで追求した場合にどうなるかという、一つのモデルケースとして現代哲学の観点からも興味を惹くものだからである。

本書の構成と概要

本書は9章から構成される。最後の9章を除く、相対化戦略の自壊に関わる8章までを以下簡単に紹介する。

1 章は、スピノザ解釈における主要問題として、一における多がいかに可能なのかということを論じる。各々の属性は同時に両立しえないと思われるが、一つの実体や様態が無限に多くの属性のもとで考えられる。さらに一つの属性の中でさえ、同じ一つの様態が考えられる仕方には無限に多くのものがあり、それらの仕方は、その様態

の原因がすべて広く考えられている仕方から、狭くその様態に内在的な性質のみが考えられている仕方まで、グラデーションをなす。しかも、どれか一つの考え方、とくに広い考え方が形而上学的に正しいわけではないし、狭い考え方もそれ自体は虚偽や幻影ではないのであって、様々な考えられる仕方の多様性が同等に実在的なものとして認められる。そしてこの一 (儉約性) における多 (充満性) の整合的な両立を意味する「完全性」という原理が『エチカ』を一貫して支配していると主張される。以下の章では、具体的にこの完全性がいかにして可能なのが検討される。

2 章では、完全性、つまり一と多の両立に疑問を投げかける、たとえば以下のようなケースが示される。『エチカ』では思惟属性と延長属性における因果性は排他的であり同時に成立することはない。しかし同一の事物が思惟属性のもとでは精神として、延長属性のもとでは身体として「考えられる」。すると両者は同一だから、精神が延長属性の持つ物体的因果性に帰属することになってしまう (一種の「代入の失敗」)。

この問題に対して本書は「概念的戦略 (conceptual strategy, CS)」を提示する。それによれば、事物がどんな形而上学的な性質 (精神か身体か、どんな因果性に属するか etc.) を持つかは、「考えられる仕方」に相対的に決まる。たとえば、事物が精神として考えられるかぎりでは物体的に運動することはない一方、同一の事物が多数の属

性を持つ可能性が保証される。

しかし一般に、事物のあり方は「考えられる仕方」と独立に決まっているはずで、「考えられる仕方」は相対化のためのインデクスとしては不適に思える。この反論に対して本書は、相対化されるべき性質それ自体が、「考えられる仕方」という概念的あり方そのものである、ということ（「概念との同一性」）が示せれば、相対化が可能であると主張する。「考えられる仕方」が変化するとき、まさにその「考えられる仕方」である事物のあり方も変化するからである。

3章は、この「概念との同一性」を裏付けるものとして、「概念的依存性一元論（conceptual dependence monism）」を提示する。『エチカ』に現れる様々な依存関係、たとえば因果、内属、説明などは、すべて「考えられる仕方」という概念的あり方そのものであることが、諸々のテキスト的証拠や、スピノザの合理主義の観点（世界のあり方自体が概念的であるがゆえに我々は世界について概念的に説明しようといった議論）から正当化される。

本書はこの後、形而上学的性質に対してCSによる相対主義的な説明を試みる。とくに4章から6章では、事物の性質から事物そのものへと向かうように、事物の様相的性質（4章）、事物の本質（5章）、事物の通時的存続条件（6章）が論じられる。しかしその先には、相対化戦略の自壊の問題が待っているのである（7・8章）。

まず4章では、『エチカ』において同一の

事物が、因果性に関して必然的であるとも偶然性であるともいわれているという、両立しがたく見える事態が論じられる。これに対して、CSにより因果関係は概念的あり方とみなされ、必然性は広い考え方に、偶然性は狭い考え方に還元されるので、事物の相異なる様相的性質は概念的に相対化されて両立しうる、という解決が与えられる。

5章では、同一の事物が複数の本質を持つとされる。とくに同一の実体・様態が属性ごとに異なる本質を持つだけでなく、一つの事物が一つの属性内で持つ本質の多様性も主張される。本質は、その事物が成す因果的な結果に対する原因とみなされるので、考えられる仕方の広さ・狭さに伴い別の本質に変化するのである。つまり広い仕方に近づくにつれ事物はより多くの原因を内在化し、自己の利益に適したより力強い本質を有する。もっとも、1章で述べられたように、広い考えられ方・狭い考えられ方のどちらが形而上学的に優位ということではなく、両者は同等に一つの考えられ方ではない。しかし個々の事物にとっては広く考えられる仕方を取るほうが力強く「良い」ことであるという意味で、『エチカ』の倫理的な次元が用意される。

ここまでは相対化戦略が上手くいっているように見えるが、6章ではその同一の事物が、考えられる仕方によっては存在しなくなる懸念が論じられる。事物は、『エチカ』においては一般に合成物であり、個体として諸部分間の運動と静止の一定の割合が維

持される限りで存続するものとして理解されている。この割合は因果的な関係であり、CS によると考えられる仕方により変化してしまう。そのため同一のそれ (it) をより広く考えようとするや否や、それそのものが存在しなくなるのではないか。

この個体の存在に対する危機は、続く 7・8 章の倫理的な次元においても変奏される。広い考えられ方に近づくと、事物はより大きな合成個体として考えられ、より多くの原因を内在化した力強い存在となる。そしてその個体に含まれる諸部分は、全体や他の部分と調和するように働く。その状態こそが、善であり『エチカ』が勧める生き方であるという。

とくに、利己的な自己保存の努力から利他的な行為がなぜ生じるのかという『エチカ』解釈においてよく知られた問いに対して本書は、他者を部分として含む新しい個体にとっての利己的な行為が利他的にもなるから、と回答する。この回答は、行為そのものの利他性を『エチカ』に発見しようとする他の解釈に比べて、上手い解釈ではある。しかし本書も認める通り、問題点がないわけではない。本書の例に従えば、私が隣人ピーターから迷惑を被っているとして、彼と私からなる全体を考え、彼にも様々な事情があることを知って私が怒りを制御したとしても、その「全体にとって」良いことが彼とは区別される狭く考えられたこの私にとって良いこととは限らない。またその全体の部分になることがこの私にとっ

て良いことも保証されない。むしろその部分になることで、狭く考えられた私の存在が危うくさえなりうる。

この問題に対して本書は、狭く考えられた私がより広く考えられた私へと自己を再同一視するように「考え直す」ことで、同一のそれ (it) が相対化を通じて存続することができる、という解決策を示す。4 章から続いていた相対化の運動はここで停止する一方、相対化戦略の自壊あるいは個体の存在の危機の問題は、一種の「自己超越」へと読み替えられるのである。

本書に対する評価

評者は、本書の CS による相対化戦略は完全には成功していないと考える。

(1) 同一の事物が属性内において複数の本質を持つという主張の根拠として、『エチカ』第 3 部定理 7 証明が引かれる。事物の現実的本質である「おのおのの物が単独であるいは (vel...vel...) 他の物とともにある事をなしあるいはなそうと努める能力なし努力」(下線評者)という証明の文言には、「あるいは」という選言が現れている。本書はこの選言を解釈して、単独で考えられた能力(狭い考えられ方)、他の物とともに考えられた能力(広い考えられ方)に各々対応する本質を事物が持ちうるという(5 章 2 節)。しかしこの選言を別の仕方を読むことも可能である。そのような能力つまり本質は事物が単独で持つものとして一つに確定しており、その能力のもたらす結果が

単独で、あるいは他の能力の助けをかりて実現されることがあるに過ぎない、と。つまり、本書は証明中の「他のものとともに」を、「自己の能力に吸収して」という意味に読むことによって、一つの事物がその考えられ方に相対的に複数の本質を持つと主張しているのだが、この読み方を取らなければならない根拠はないのである。

(2)自己に他の能力や原因を吸収していくというこの説明戦略のゆえに、6章以降で個体は存在の危機に遭遇した。これに対して本書は広く考えられた自己をより狭く考えられた自己に再同一視することで答える。しかし再同一視の内実は、同じ自己の異なるバージョンに変化することであり、このバージョンの変化とは結局、本質の変化であるとされる (p. 224)。(1)からそもそも複数の本質の存在は疑わしいが、本書が主張しえたのは、もし再同一視が起きたならば、再同一視された複数の本質を含むような自己が存在しえるという一般的な可能性だけである。狭く考えられている特定の自己が、自己の存在の危機をおかしてまで、いかにして別の自己へとジャンプして再同一視を行いうるのか、本書の枠組みからは説明されない。むしろ自己保存の努力に逆らったそのような考え方の変化は不可能であるか、あるいは可能とされた時点でその事物の同一性も破壊されていることになる。「考え直す」ことによって相対化戦略が自壊の危機から救われることはないのである。

(3)仮に「考え直す」ことで狭く考えられ

た自己から広く考えられた自己に変化することが前者にとって善であるとしても、具体的にどのような広く考えられた自己と再同一視されるのか、本書は明らかにしてくれない。本書は再同一視されうる範囲についてはきわめて広く、可塑的に「私」を捉えており (8章3節)、事実上は一定の制限があるにしても理想的には、出遭ったものはどんなものでも制約なしに自己に吸収同化していくべきと主張しているように読める。『エチカ』において、活動能力を増大させることが重要であることは確かだが (第3部定理 12 etc.)、しかしそれは、何らかの狭く考えられた自己にとって好ましいものを取捨選択していくということであろう。自己の範囲を広くしていく際の制約条件を本書が示せていないのは、「考え直す」という方法に欠陥があることを示唆している。

こうしたいくつかの難点にも関わらず、『エチカ』の多くの箇所が相対化戦略により統一的に説明されうることは決して過小評価されてはならないし、このことを包括的に論じた点で本書には大きな意義がある。さらに、相対化戦略の自壊についての懸念が、「考え直す」ことによっては解消されないからといって、相対化戦略自体を諦めるのは早計と思われる。「考え直す」ことは、相対化が可能であるために要請されるところの、考えられる仕方にかかわらず同一に留まるそれ (it) の存在をただ宣言し、それ以上の相対化を無理矢理に停止するための

方法だったといえる。しかしその同一性とは誰によって考えられているものなのか、相対化を停止しようとすることは本当に相対化のために必要なのか、無限に相対化しつづけることはできないのか、といった点について考え直し、相対化戦略の持つ潜在的な帰結をさらに引き出す方向が、本書を継いだスピノザ研究としてありえよう。